

フレーパーティーや闘茶会 川根茶で触れ合う時間

館内の喫茶コーナーでは、商工会職員が川根茶のフレーパーティーを無料で振る舞っています。ブルーベリー、ゆず、うめ、バラの4種類のお茶はどれも独特の香りや味。来場者は思い思いの茶を選び、香りを楽しみながら、ゆっくりと味わいました。

午後1時過ぎには、記念SL列車が千頭駅に到着し、大勢の観光客が会場につめかけました。出迎えるように始まった赤石太鼓。迫力ある太鼓の演奏が山肌にこだますると、会場内はふたたび盛り上



▲フレーパーティー試飲ブースを担当した商工会職員は「全体的にゆず、ブルーベリーのお茶が人気で、皆さん『おいしい』って言ってくれました。若い年代の人には、バラの香りが人気でした」と話していた。

がりを見せ始めます。

音戯の郷内の広場ではお茶餅つきを実施。杵と臼を使って餅をつく風習を知らない子どもには新鮮な光景。子どもたちは目をキラキラさせながら、杵を振るう大人に向かって「頑張れ」と声を上げていました。つき上がった餅は、きな粉をまぶして来場者に無料サービス。味は格別。あつという間になくなりました。

その隣では、茶業青年団が実施した「闘茶会」に大勢の参加者が集まりました。闘茶会は、5種類のお茶を飲み比べ、香りや味、見た目などから品種や銘柄を当てる競技です。初めて挑戦する人も多く、一口味わつては首をかしげる光景があちこちに見られました。大人顔負けの表情でお茶の飲み比べをする子どももいました。

今年で6回目を迎えた「川根茶の日イベント」。今回も町内外から大勢の来場者が訪れ、川根茶の魅力満喫しました。

それは同時に、川根茶に関わる人々との「触れ合い」を楽しむ時間でもありました。

川根茶業協同組合のおかみさんたちで構成する女性ならではの視点で川根茶の普及促進を図る

◀「サークル茶の葉」の皆さん

今回のイベントには、川根茶を使ったアイデア料理を出品し、皆さんに振る舞いました。川根風スプリングロール（春巻き）、うぐいすげんこつあめ、ミルクもち、茶がらの佃煮、俵おむすびなどを出品し、来場者の皆さんに好評でした。どれも家庭で手軽に作れる一品です。レシピを持ち帰った皆さんが、ご家庭でも川根茶料理を試してくれたらうれしいです。



Top Interview

川根茶と共に暮らす私たちだからこそ、茶どころ特有の文化を育てていきたい

私たちは川根茶の産地として、誇れる技術や実績を持っています。毎年開催される全国茶品評会でも上位入賞を繰返し、その品質の高さは内外から高い評価を受けています。

しかしながら、品質の高い茶を作る、出荷するという面は長けていますが、まだまだ「お茶を消費する文化」としては熟成が進んでいないのではないのでしょうか。これからは作るだけではなく、「お茶と共に暮らす」という文化の面も大切にしていきたい。そういった価値観を外に発信していくことが、将

来に向け必要になってくると思います。大井川に沿って、山の中腹にまで広がる茶園の風景は、外から訪れる人に大きな感動を与えるものです。茶どころに来たという実感を、訪問者に与えるのだそうです。

さまざまな取り組みや催しを通して、川根茶が持つ魅力、素晴らしさを内外に広めていくことが大切。この川根茶の日イベントもその一つです。

この町ならではの『茶どころ特有の文化』を、私たちの手で育てていきたいと考えています。



川根本町長 佐藤公敏

お茶で「日常」を取り戻す 心の安らぎを取り戻す

東日本大震災の復興支援に向かったボランティアの人によると、被災地の人は「温かいお茶を飲むことで、日常を取り戻したい」と言っていたそう。それを受け、川根本町では茶業協同組合などが中心となって、川根茶を現地に届けた。

後日、ボランティアの人は「お茶が避難所の人たちの良いコミュニケーションツールとなっています。また避難所に携わる行政、消防、医療関係の人の中にも被災した人が多くいますが、そうした人もお茶を飲んでリラックスしています」と話していたという。余震や原発の不安が消えない被災地。次第に物資は揃いつつあるようだが、心の休息はまだまだ訪れない。そんな中、川根茶が被災者の心には、ほんの少しでも安らぎの時間を提供することができたのなら、それは私たちにとって、これ以上ない喜びだ。

お茶は「健康」だけか？ 「文化」とは何だ？

あるテレビ番組で、県内産深蒸し茶の健康機能性が取り上げられ、たちまち大人気になったのは記憶に新しいところ。その市では、インターネットなどによる注文が殺到。販売店では、うれしい悲鳴を上げたという。

確かにお茶は「健康」に良いといわれ、さまざまな効能が解明されつつある。飲む以外にも、食品にしたり、薬品にしたりと、その可能性も近年では多岐にわたる。

しかし世の人々は、健康のためだけにお茶を飲むのだろうか。もちろんそういう人も多だろうが、お茶がもたらす効果は決してそれだけではないはずだ。

昔から、食事のお供として親しまれてきたお茶。あるときは客人をもてなし、仕事の合間には一服として、地域の会合の場にも登場する。日常生活のあらゆるところに「川根茶」が存在する。勉強

会を開く大人もいるし、学校で学習する子どもたちもいる。まさに「川根茶と共に暮らす文化」が、ここにある。

この町には川根茶がある これからも共にある

町の人に取材すると、よくこんな言葉が聞かれる。「川根茶がなくなったら、この町には何も残らない」。茶価の低迷、嗜好の多様化、産地間競争、後継者不足など、川根茶を取り巻く現状は厳しい。悲観的になってしまいうからこそ、つい口から出てしまう言葉なんだろう。

でもそうじゃない。「川根茶があるから、この町が成り立ってきた」のだ。先人たちが築き上げてきた努力と情熱の結晶とも言える川根茶は、今を生きる人々の手で守り育てながら、これからも、この町の人々と共に未来へと歩んでいく。

くつろぎや安らぎの時間すらお金を出して買う時代。川根茶が、私たちに与えてくれるものは何なのだろう。今晚あたり、家族みんなで考えてみるのもいいかもしれない。川根茶を味わいながら、ゆっくりと、ゆつたりと。終

川根茶が醸し出す 「安らぎの時間」が広がってゆく――